

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 成瀬 翔

論 文 題 目

空名の指示の理論と現代フレーゲ主義の可能性

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	田村 均
委員	名古屋大学	教授	金山 弥平
委員	名古屋大学	教授	宮原 勇
委員	名古屋大学	准教授	畝部 俊也

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、「サンタクロース」や「シャーロック・ホームズ」のような、指示対象をもたない固有名（「空名 an empty name」）に関わる意味論上の難問を扱う。序論で問題提起と論文全体の構成を述べた後、歴史的な順序に沿って1章から6章まで空名問題の解決手法を吟味し、結論において今後の展望を提示する。

第1章は、現代の言語哲学に基本的な方向を与えたフレーゲの意味論の概略を述べ、空名の無指示性が理論上の難問になる所以を説明し、あわせて可能な解決策を提示する。そして、虚構的对象を一種の实在と見なすマイノグ的手法は採るべきでなく、むしろフレーゲに萌芽的に見出される名前の反射性(reflexivity)への着目、すなわち、発話の文脈に言及する再帰的な指示性への着目、を生かすべきであるという基本的な立場を確認する。

第2章は、ラッセルの記述理論と、これに対するストローソンやドネランの批判を扱う。「現在のフランス国王」のような指示対象をもたない確定記述は、周知のようにラッセルの記述理論によって、虚構的对象を導入せずに解釈可能となる。だが、これによって必ずしも空名の問題がすべて解決できるわけではないと指摘される。

第3章は、固有名の指示に関する記述説と因果説を対比する。固有名の指示性の説明としては因果説が妥当であるが、因果説を採ると空名の問題がより大きな難問となる、という事情を浮かび上がらせる。

第4章は、ケンダル・ウォルトンの、空名の指示に関するメイクビリーブ説を検討する。メイクビリーブ説は、伝説や小説の鑑賞体験の分析として優れているが、言語哲学的な構造を欠くため、虚構的对象の導入を全面的にしりぞけることができるのかどうか、必ずしも明らかではない、という問題点が指摘される。

第5章は、フランソワ・レカナティの固有名の使用に関する心的ファイル理論を検討する。この理論は、空名の使用場面における意思疎通の事実を説明できるが、空名の指示対象をどう扱うべきかを説明しない、と批判される。

第6章は、ジョン・ペリーの固有名の反射性の分析と、社会的ネットワークを背景とした心的ファイル理論を検討する。固有名の発話自体に定位する反射的指示と、指示作用が社会的ネットワークに相対化される現象とを通じ、空名の関わる虚構的对象は、実体性を伴わない社会的事実として構成できる、ということが示される。

結論は、ウォルトンのメイクビリーブ説と、ペリーの社会的ネットワークへの指示の説とを結びつけ、本論文で得られた成果と、さらなる展望とを述べる。すなわち、ウォルトンとペリーを総合することにより、空名は、伝説や小説などの虚構的な語りの中で、指示対象が社会的事実という形で受け渡される共同的な想像の媒体として理解可能となる。こうして、空名を用いて人が何をしているのかを扱う虚構についての言語哲学という新しい領域が展望できる、とする。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文の取り上げる空名の無指示性 (no-reference) という問題は、フレーゲの意味理論の強い影響下にある現代の言語哲学において、特有の難問となっている。本論文は、フレーゲの意味理論の概要を提示することから論述を開始し、現在提起されているいくつかの解決策を比較検討して一定の見通しを得ており、力作と呼ぶに足りる充実した内容を備えている。

本論文に関して、第一に評価できる点は、空名の無指示性という問題を、フレーゲ以来の言語哲学の歴史の中で正確に捉えた点である。フレーゲは、言語表現に意義 (Sinn) と意味 (Bedeutung) という二つの意味論的アスペクトを与えた。この二者は、基本的に、ある表現の標準的理解 (意義) が、その表現の指し示す世界内の事物 (意味) を決定する、という関係にある。フレーゲは、固有名 (主語) が実在の対象を意味として持ち、概念語 (述語) が実在の属性や関係を意味として持ち、文全体が真値を意味として持つ、と考えた。この場合、文の真偽は、固有名が指示対象を持たなければ確定しない。それゆえ空名を含む文は、真ないし偽なる何ごととも言い表さないことになる。フレーゲの関心は数学的言語にあったため、空名を検討する必要はほぼなかった。だが、日常言語では人々は空名によって何ごとかを言い表している。言語一般に関心を持つとき、空名の働きを考察する必要がある所以である。本論文はこの経緯をフレーゲまで遡り、そこから現在の諸理論に至る過程を的確に描いている。

第二に評価できる点は、現在提起されている空名の説明理論の中から妥当と思われるものを複数取り出して詳細に検討し、新たな展開の方向を示唆した点である。すなわち、ペリーの言語哲学的分析とウォルトンのメイクビリーブ説を接合して、空名を、社会的ネットワークを指示する共同的な想像活動の中に位置づけたのは、一つの新しい展開である。

第三に評価できる点は、マイノン主義や名前の記述説など、論者が必ずしも肯定しない立場にまで目を配りつつ、多数の文献をバランスよく取り扱って、包括的な論述を構成している点である。

以上は本論文に関して評価できる点であるが、批判すべき点もある。第一に、フレーゲ以降に特化した結果、そもそも空名とは何か、空名と空名でない名辞はきっぱり分けられるのか、といったより大きな問題が触れられずに終わっている。第二に、ペリー説とウォルトン説の総合の必然性が、まだ十分に説得的ではないと思われる。第三に、英文文献の翻訳に改良の余地がある。だが、これらはいずれも今後の研鑽によって十分克服可能な瑕疵であって、本論文全体の価値を損なうものではないと判断される。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士 (文学) の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。